

COSMOS集



楠の葉

松井恵子 茨城
「あすなる集」特選

四月から職場復帰の予定だが毛玉を付けたままゆくだらう
積み上がる業績はなくもくと空へと伸びて日を受ける楠
ポケットに楠の葉を入れ不安なる今日のこころを握りてあたり
べきべきと細い小枝を踏み鳴らし藓苔類の地面を歩く
新しい命があたりらしいせかいつくるのだ、その、子のうんち拭く

大喜利 松井竜也*茨城

曲げられたスプーンたちの幽霊が街に溢れて今日天気雨
難しいことを言いたい人たちが難しいこと言つて楽しげ
この一点において正義は我にありと顔に書かれていて目をそらす
ゾウの上にゴリラまたがりジャングルを進んで行くかのごとき顔する
君とする大喜利楽し眠る子を挟んで僕ら笑い堪えて

七五調 塚原明子 愛知

「青い山脈」の七五調身をめぐり冬の鬱期の破調を直す

前の世は魚のわたくしスーパーに同胞はなわらわの身を安値にて買ふ
青空に春の潮の満ちあふれ波頭のごとく白梅は咲く
春ごとに想ひ寄せられ詠はるる花の心を誰も思はず
前頭葉のみを修理に出せなくて 本日晴天サプリは10粒

風の午後 北 祐二郎 佐賀

カレンダーの奥の壁には大き穴 子の反抗期の記念に残す
贈る言葉残されしままの黒板に春の光の白く差しこむ
部屋の中の片付くほどにダンボール箱は溢るる引つ越し前夜
展望のデッキにたたずむ風の午後子のひかうきは今飛び立てり
女子寮へ引つ越しの荷を運ぶとき「お父様でも玄関まで」と

花の声 大久保 ますみ 鹿児島

落ち椿のうへに咲きたる寒椿赤と赤とのつくる空間
「寒いね」とあいさつ交はす夕まぐれ平成最後の睦月去りゆく
咲き競ふヒカンザクラの並木路に花の声ともとれる風音
町道に甘蔗かちを積みたるトラックと空のトラックひと日行き交ふ
鮭ひら売りが大音量でわれを呼ぶわれも返事のボリユームを上ぐ

揮毫 下城 公秀 熊本

皇甫誕臨書の後に揮毫する卒業証書の氏名文字群
「子」に終はる名前少なくなりけり平成最後の卒業証書
不器用と粘り強さが父に似て書道継続今にいたるなり
四十年過ぎて我らのルビー婚ナチュラルルビーの指輪で祝ふ
自衛隊女性三曹のソプラノの「祈り」は震災たましづめ歌

再 建 園 田 由美子*熊本

地震後の自宅再建なされたる平屋の屋根に紅梅しだる
校庭の公孫樹の枝は早春の光やさしき空をまどえり
大麦の若葉刈られて水色の空にさえざる雲雀は一羽
麦の葉を刈りて収むる大ぶくろ軽トラツクの荷台に二つ
子育ての支援を学ぶ昼下り路面電車が音たてて過ぐ

一重のつばき 一ノ宮 陽子 鳥取

携帯に残れる母の番号を消せないままに三年の経つ
君の家に群れ咲く冬の水仙のかをり届かぬ距離を歩めり
駅裏の(中山石油)店を閉ぢ高層マンション建設中なり
降りつもの雨を含みて椿落つ母が植ゑぬし一重のつばき
甘夏を取りにおいでとLINEする顔がみたいと子には言へずに

西海讃歌 鶴田 竹一 長崎

心身を支へしホルト火葬場で箸に除けられお別れとせし
「こんなこと有りませんか」の項目に二三つある認知度テスト
愛宕山登りきり手を合はすとき十字架の欲し異教徒吾も
薪くべて火吹き竹吹きし戦後史を思ひ出させる古きかまどは
卒業式に西海讃歌歌ひあげ大海原に漕ぎ出す君ら

供華の花かご 練合 そとみ 富山

単身者なれどまごま買ふ物あり息子と生活用品求む
十五歳と一ヶ月生きて飼ひ犬逝く平成三十一年三月一日
転勤の息子の旅立ち見届けて飼ひ犬翌朝やすらかに逝く

身罷りし愛犬の名の宅配来ぬ娘の友からの供華の花かご
棄て畑の枯れ草押し上げ立金花 日溜りに咲く一面の黄

われの半生 菊山 正史*広島

一年後辞めた職場に行く朝は報告が書けない夢をみる
組織という列車の後尾にぶら下がり旅したようなわれの半生
職退いて宇宙の中に放たれた軌道なき粒子のごときわれ
村中をジョギングするはわれ一人七十路はみな日稼ぎしおり
職がなく集落歩む昼真昼トラクターの音われを苛む

いぶりがっこ 浅田 みどり*東京

雑壇に設うこともなくなりて内裏びなのみ飾るひなの日
菜の花は見頃すぎればたちまちに引き抜かれたりフラワーパークに
きのうまで心に重きひとつ事どうでもよろしと思える不思議
四歳児の両手のなかでへびとなりワニとなりゆく小麦粉粘土
煙の味いぶりがっこに閉じ込めてけむりまで食ふ秋田の宿に

病室の午後 塩山 美恵子 兵庫

幼き日の母のおやつはいりこ、こぶ九十六歳おのが歯で食ぶ
いつ誰がどこで何をといふやうに昔を母はしかと記憶す
たらちねの母に代りて主治医よりガンの宣告つしみて聞く
それぞれの娘の会話はズれるとも話はずむ病室の午後
人住まぬ母の実家は寂れゆく庭いちめんにつくしが生えて

みっちゃん 萩原 栄子 埼玉

「おぎちゃん」と呼びぐれし友若く逝き二八の蕎麦はもう語れない

「みっちゃん」は山形育ち相槌の「んだんだ」に心なごめり

おたがひのグチを言ひ合ひ笑ひ合ふ女同士の心の掃除

風下に煙草ふかせる「みっちゃん」の何想ひしかやさしき目元
白ペンキまだらに剝がれる鉄の橋ヒカピカの日を知らないわたし

編み目美し

井上啓子 愛知

寒き夜は夜具にふはりと掛けて寝る姉に貰ひし手編みのストール
編み物も和裁も得意なりし姉 今は何度も同じこと聞く
膝に掛け肩に羽織りて三十年編み目美し姉のストール
改札を出でて涙をこぼしし日ふと思ひ出す歌会の帰り
キーワード検索駆使し探したり閉架に眠る「マチウ書試論」

雪消え

磯部 剛*新潟

雪消えの模様に見たり亡き猫の背中まるめて座りし姿
海を越え魚沼の地に嫁ぎ来しわが母親は施設で生きる
話を濃くしないようにと気を遣う若い人との飲み会の場で
太陽のかげらのごときクロッカスの花が咲きおり雪のとなりで
肩の荷を下すかのごと魚野川波を光らせ信濃川と合う

願いを歌に

寺田 静*神奈川

会見のデスクにならぶ録音機まっかな一台のみ作動せず
いまきみがマイクについた些細なる嘘はわはわと春の電磁波
嘘つもる土の嵩だけ嘘つもる汚れていないはずの汚染土
ぬばたまのトヨタセンチュリー走り去る霞のなかの西車寄せ
ほんとうの怒りは深き山奥の梢の下のどくだみの花
ひとひらの願いをうたにのせ飛ばす一票かるき島の浜風

餅米 二升 片山清子 和歌山

搗きあがる餅米二升をみならの手からつぎつぎ小餅生れくる
初午の一斗二升の餅つきを終へてぜんざい食む二十名
婦人会卒業するや老人会誘はれにけり心うごかず
直前のことば忘れる元先生「ふるさと」歌ふ音程たしか

老いびとは爪切られつつ「気持ええ」プチプチと立つ音をよるこぶ

二月の運河

池上昌子 東京

くもり日のしろきひかりを水仙は浴みつつ咲きて風に匂へり
冬の翳ふかく蔵へる水底を運河はもちて春日きらめく
水中に棲む魚族がと光り二月なかばの運河は昏し
琥珀色かをるコーヒー淹れ終へて人の打ちあげ話をきけり
石板の橋わたれる人の影ひとときゆれて水面がさわぐ

中也の詩

斎藤のり子 岩手

頂きし小粒の柚子のあつき皮去年の秋をたつぶり囲ふ
神棚に供へし榊の一片がかさつと降り来る冷たき床に
ロタン彫りしバルザックの太き首時に頭ちきてわれを励ます
週一の夫のリハビリ有難し留守の四時間ピタミン剤なり
夕さりて苑のブランコ静まれり中也の詩が聞こえるやうだ

花東

水野 須美子*宮城

ジャケットをフェンスに掛けて子供らは蝶さながらにそちこち駆ける
ジャングルジムに使用禁止の貼り紙が風に揺れつつ春の校庭
花束を二つ三つ選る老紳士待つ人の居るゆとりを醸す

やわらかき春の陽入れれば縁側に雑布がけする修行僧のごと
川の面に水切りせんと放りたる石は寂しき音のみ残す

水路の水 田 仲 淳 子 奈良

山路ぞひ青畳なすひととこ羊齒はさはさは春陽と遊ぶ
耕人の亡くなりし田の間をゆく水路の水は生きつづける
腰痛はいかがと訪ひぬ冬の間を野菜分けあひこし畑友を
地にまみれ四季に凭りゐるわが暮し「それでいいよ」と鶯の啼く
この春は海への旅に出かけたし到来物の牡蠣を焼きつつ

餅まきの里 久 保 夫 佐 三重

荒れ山に倒れしままの梅の木にちらちら咲くが遠目に見ゆる
年女次の巡りはあるらむか暖冬に生ふる畑草を引く
子供らの菓子はこちらと叫びゐて空晴れわたる餅まきの里
僧七人餅まく僧の袖が舞ふ笑顔、歓声冬田に流る
肩揉むによき角ありて市役所の待合室の椅子に凭れる

享 保 雛 小 関 八重子 山形

紅の衣まゐやや褪せたれどおほどかにつやめく面輪享保のままに
三もとせの移ろひみてきた享保雛がいちばんでしよ戦もなく
享保雛が目の前にあり吉宗も目安箱さへうつつにあるごと
できぬこと一つ二つと増えゆくが新たに挑むケーキづくり
オープンより取りいだしたるケーキの香戸所から居間にまでみつ

厨あかるし 柴 野 房 江 石川

和服着てをなごになりし二人連れ紅梅を背に自撮りしはしやく

歩くこと日々の布団の上げ下ろしささやかなれど暮しのリズム
ひとり居を自由気儘に過ごす日々健康寿命といふ言葉を目指す
はるなつあき葉のみ付けたるシクラメン冬の最中にそり返り咲く
五百円の鱒の中落ち刺身また昆布締めにする厨あかるし

覗 く 内 田 妙 熊本

ぼつかりとみどり葉のかげ佐助の赤き一花がこの世を覗く
展望台目指してらせん階段を丁寧のほり息をはづます
五十段のぼりつめ立つ展望台に有明海はうすがすみせり
漱石の作品あれこれのびつつ草枕温泉に春の身浸す
閉校となる校旗なり降ろされて折りたたまるる三月かなし

キーンさん逝く 蕪 沢 陽 子 千葉

「源氏」には戦さが無いと称へたるドナルド・キーンさん逝く如月の朝
日本と日本人を愛したるドナルド・キーンさん逝く青空深し
百人一首書き写しつづつ偲ぶかないにしへ人の心のさまを
超高齢になりてわかりしこと一つ晴れの日楽し雨の日淋し
早春の日暮はのびて夕焼の空に一羽の鳶は舞ひをり

幸せの沸点 笠 井 秀 子*徳 島

「コンビニも閉店時間設けたい」一人の店主当り前を砕く
新人かバスの運転手後ろ身に仕付糸あり声きりきりり
氣迫満つる水産高校女生徒の鮭の解体 周りも力む
せかせかと冬を急かせるごとく吹く春一番はあの人に似て
七年で心は脱皮するとうい そうか、待とうか春を七度
幸せの沸点微妙に近づきて夫とわたしの過ぎし四十年

椿 一 輪 杉 沢 千 恵 東 京

渋滞のバスの中より見るパン屋客足もなく氷雨降りつぐ
鈍色の雲垂れこむる今日こそは雪降らせたとし東京の街
春雪は期待はづれの雨となり白梅は冷たき露を光らす
ひっそりと椿一輪咲きあたり朝の乏しき光の中で

出張の子の町さがす世界地図カリフォルニアなら暖かだらう

みどりのピアノ 風 岡 俊 子 静 岡

路の臺のあなたに会へて幸せとみどりのピアノの音のする山
のりしろのやうな真昼の日向ほこ辛夷と桜、梅も咲く庭
夕暮れの庭にハンガーゆらゆらり独りぐらしは風に吹かるる
三月の光次々巻き込んで畑の土を掘り返し行く
春耕を終へし野良着を洗濯機にゴゴギダダ濁音の歌

「大根を回して抜くと楽ですよ」回りに育つ大根が言ふ

あなたの味方 工 藤 亜希子* 神奈川

「その二集」特選

覚園寺の十二神将姿よし眼光鋭きイケメンぞろい

とろとろと溶けてしまおう春風にランタンキュラスの揺れるまにまに

オフィスの抽斗の中チヨコたちは「あなたの味方」という顔でおり

幼き日不可解に聴く「老人と子供のポルカ」いまだ不可解

年輪は首筋あたりかさつくりとバウムクーヘン切り分ける午後

何か食べる? 荒 川 ゆみ子 東 京

ひな人形飾ればたちまちリビングにあやに美しき異界あらはる

宵節句わたしのためのちらし寿司さくらでんぶをひかへめにおく
おつとりと目もと優しき女びなななりなごり惜しくてゆるゆる仕舞ふ
ドイツまで会ひに来し日のコート着て父はわたしを夢に訪ねる
衰へし父の姿にとまどひて「何か食べる?」とそればかり訊きぬ

お久しぶり 永 田 恵 美 福 岡

看護師にお久しぶりと迎へられ再入院の初日始まる
病室の窓から見ゆる黎明の街は静かに目を覚ましゆく
小規模な(白い巨塔)の軍団が訪れ来たる朝の病室
正月もお雛祭りも病院なり四月一日は誰かだまさう
平成が終はりてもなほ忘れてはならぬことあり水俣の海

ずぶぬれ 水 辺 あ お 静 岡

天界に騒ぎあるごと大小の白雲西へ疾く流れゆく
窓を背に首うなだれてスマホ見る人の向かうの千本松原
人間の声聞き動く機器生まれ人の話を聞かぬ人増ゆ
為政者の嘘はシャワーの湯のごとしはねて周囲をずぶぬれにする
怪我をして好きな部活を辞めるとき天罰と言ひし教師のありき

献 杯 伊 藤 祐 楓* 茨 城

お看取りのあとには味噌だけ肴にし独り献杯、澄んだ焼酎
あの人にまだ息ありや静かなる携帯電話に生き死にを問う
半月の光と影の境目のほやけた辺り 夕方ですか?
背徳に満ちた歌しか浮かばぬ夜それでも詠めと声が聞こえる
お看取りの後もいつもの朝が来て眠たげな子がハグを求める
予想せぬ残業終えた夜を癒すシヨコラ風味のエスプレッソは

紅 雨 中 村 京 兵 庫

つくばひのみなもにうつるごくじやうの月は月齡十六二一のぞみ号に忘れしマフラーもどりくる五桁の識別番号をつけ少年ら三角ベースにあそび足り野道るんかへさをいそぐ明けがたに紅雨しとしとふる気配 スノータイヤはもう脱ぎませうすがのねの長きひとしと夜明けゆきて不真面目主婦に着替へはじめ

土筆 つんつん 友 田 昌 子 * 奈良

真つ白い霜のきらめく春耕のすみし田んぼが目醒めゆくととき二年ぶりの同窓会に「どのドレス着よか?」夫は「誰も見てへん」貴公子のようにたたくむこがね色のミモザの花があふれ咲きたり真昼間のようなライトに照らされてハウス母は夜もねむれず飛鳥野のキャッチボールの子の声を浴びて土筆はつんつん伸びる

ガラス戸の中 野 口 喜美江 * 群馬

夕暮れの庭の水仙白々と只しろじろと妣をしのげば腰をかばい肩を揺らして歩く人あれはわたくしガラス戸の中都市計画徐々に進みて友の家に来るたび迷い今日また迷う玄関の壁にかかげるちひろの絵ドアの開け閉めにわずかに傾ぐ苛立ちを抗いをただに鎮めんと化粧濃くしてこもれるわれは

こゝめざくら 佐 野 仁 * 香 川

沈丁花の匂うあしたに兄征きき言葉すくなく覚悟記して雪やなぎを「こゝめざくら」と今も謂う妣の郷里の美しき言葉

尊厳死を選^{えら}びし人は未だ若し是とする我と非とする妻と再婚の娘に連れられて孫も去り妻と二人の追^お離^ちわびしも鳥影に怯え小鮒の潜り込む水草の辺はささ濁りする

今日より弥生 宮 沢 民 子 新潟

新しきスマホの画面を指先でタップタップとメールをつくるあたたかき光をうけて里山のオオヤマザクラは芽ぶきはじめる見送りの吾になんども振りかへり子は改札の向かうへと消ゆ咲き初める冬の桜は凜として明治生まれの母のやうなり吾が庭の椿の蓄色づきて日差し明るし今日より弥生

仕 合 せ で 河 上 美代子 福岡

はなやげる「雛」の茶会に招かれて娘の御点前をしづかに目守る「雛の膳」で福祉の方にもてなされる独りぐらしの翁、媪は風邪の吾に黒にんにくの手作りを「元気になるよ」と娘は持ちこくる臭みなき黒にんにくのひとかけら意外とうまし朝夕に食む仕合せで長生しさうと娘に言へば九十四のわれ見て笑ふ

「ラ」音 畑 都 * 鳥 取

指先に取り付けられたセンサーは乱れた脈を「ラ」音で知らず鳥取の天気図に大きき雲ひとつシートの洗濯明日にしよう外見も大事とオシャレな姉は吾にシミ対策をしつこく奨む風呂上りに孫に塗布する保湿劑寒さと和らぎ大きく伸びる雛飾り今年を最後と思いつつ雪洞点して一夜眺むる母逝きて訪ねる人の無き家に戻りて一人山茶花を掃く